

留学報告書

東京大学大学院工学系研究科航空宇宙工学専攻
藤本・上西研究室 修士2年 桑原麻季

派遣先大学名：Imperial College London (London, UK)

留学期間：2014年10月から12月(約3か月)

1. 留学準備

1.1 応募

私が今回応募した理由は、同じテーマや興味を持ったより多くの方々と議論をしたかったからです。普段の修士研究では、学生毎にテーマが全く異なり、研究内容について議論する機会があまり持てなかったため、より多くの研究者、学生の方と関わりたいという気持ちが強くありました。その中で、英語圏であること、ロンドンには旅行に行ったことがあり、一人で暮らすことへの不安が他国よりも少なかったことから、Imperial College Londonを選びました。

応募方法は、東京大学側にまず Learning Agreement、TOEFLスコアなどの書類を提出した後、英語で面接を受け、オンラインで Imperial College London に直接応募する、という形でした。応募書類には、渡航は原則10月4日以降、と書かれていましたが、かなり柔軟に決めることもできるようで、希望時期などはしっかり考え、相談した方が良かったと感じました。

1.2 渡航前準備 - 研究面

応募を決めた時点で締切が迫っていたため、受け入れ希望先の先生へのコンタクトなどが事前にできず、先が見えないまま応募書類を揃え、面接を受ける、ということになってしまいました。しかし、Department of Materials の方々に非常に親切に対応していただき、結果的にはすんなりと受け入れ先を見つけることができました。その後は、受け入れ希望期間、希望テーマなどを受け入れ先の先生と相談していきました。

また、私の場合は、修士研究のための実験が少し遅れていたため、何度も研究計画を話し合い、共同研究先にできるだけ通い実験を行い、渡航前に基礎となるデータを集めました。Imperial College London への派遣は原則修士2年以上の学生ということで、修士論文についても、きちんと日本の先生と詰めておく必要があると思います。(留学先の研究を含めることもできると思いますが、慣れない環境での短期滞在であることを考えると、大きな成果が得られることは考えにくく、渡航前にある程度固めてから行くことが望ましいと感じます。)

1.3 渡航前準備 - 生活面

渡航後の生活のための準備ですが、宿を探すことは、海外であるため現地に行けず治安状況も分からないことを考えると、大変だと思います。私は、たまたま旅行時にお世話になったシェアハウスに空きがあったので、そこに入ることができました。地域によっては治安も悪いので、過去に留学された方にコンタクトを取るなど、他の方の助けを借りる方法や、早目に現地に入って時間をかけて見て回るなどの方法を取ると良いと思います。

2. 留学期間中

2.1 研究生活

最初の1週間は、先生やポスドクの方と留学期間中に行うことについて話し合いました。その後は、ポスドクの方にこまめに見ていただきながら、お互いに考えていることを共有し、次に何をすべきかを話し合う、という形で続いていきました。そのため、生活自体は、相談しながら個人で作業という、単調と言えば単調なものでしたが、テーマを共有し、自分のやってきたことと相手のやってきたことと合わせて、一つの考察をする、という機会は日本ではあまりなかったので、非常に楽しむことができました。

また、研究室にはたくさんの PhD の学生とポスドクの方が所属していて、議論も活発で、先生やポスドクの方が PhD の学生の相談に乗る光景はかなり頻繁に見られました。私は研究生という立場でしたが、修士も出ていない学生ということで、PhD の学生はじめ、たくさんの方に助けていただきました。他の学生の研究の様子は、人によって様々で、毎日朝から晩までいる学生もいれば、週2日ほどしか来ない週がある学生、夕方来て2時間ほどで帰る学生もいました。平均的には9時から17時頃が中心で、その他の時間は、締め切り間際でもない限り、先生も学生もかなり少なかったです。

そして何よりも、お世話になった指導教員の方が、とても親切でエネルギーにあふれ、かつ面倒見も良く、他の学生の評判も良い先生であったということは、非常に幸運であったと思っています。

2.2 友達、語学面

基本的には作業自体は自分で進め、定期的にミーティング、という形で、各学生自分のペースで休憩を取っているのので、研究関連以外の日常的な会話をする機会は多くなく、友達と呼べる人もできにくい環境だと思います。しかし、生活していると、些細なことでも聞きたいことがたくさん出てくると思うので、積極的に聞きに行くことをお勧めします。そうすることで、自然に話が盛り上がることもありましたが、そのような些細な会話がとても英語力向上に役立ったと思っています。また特に短期留学の学生だったために、なぜ短期で来たのかなど不思議に思われていることも多かったようで、東京大学の留学制度についても説明したりすると、とても興味を持ってくれました。そのようなきっかけで、留学後期には、お昼を一緒に食べるような友達もできました。

英語に関しては、住んだことがない人であれば、どれほど勉強していても始めは苦勞するように思います。人によって訛りもスピードも異なり、日本で聞くような綺麗な聞き取りやすい英語は誰も話さないの、少し戸惑いました。やはり慣れないとどうしようもない部分も多いと思うので、些細なことでも話しかけて積極的に関わっていく以外にないように感じました。また、Imperial College London は海外からの留学生が多く、きちんとした英語を話す学生ばかりではないので、例え間違っても話しかけに行く勇気が必要な反面、きちんとした英語を話すにはやはり自分で勉強することが必要だと思います。

2.3 その他の過ごし方

土日や平日夜は自由な時間がたくさんあったので、余裕のある週は Cambridge に行ったり、一日ツアーに申し込んだりしました。しかし、London は観光名所がいっぱいあり、3か月弱という短い留学期間では、市内をめぐるだけでも充分だったように思います。博物館や美術館は大きいところは無料なので、何度かに分けて行ったりしました。また学生証で無料になるところも多くあるので、博物館・美術館見学が好きな方

には飽きない場所だと思います。また、私はミュージカルが好きなので、平日夜に安いチケットを買って何度か観に行きました。

一つ気をつけた方がいいと感じたことは、日本人が比較的若く、気弱に見られがちで、話しかけて金品をねだってくる外国人に標的にされやすいことです。個人的に被害にあったことはなかったですが、話しかけられたことは何度もあり、また標的にされた日本人観光客も見かけました。周りにどのような人がいるのか常に気をつけながら歩くように心がけるべきだと思います。

3. 最後に

修士 2 年の終盤に 3 か月も渡航することを認めてくださった藤本先生・上西先生、共同研究先の北條先生、先も見えないままに応募したにも関わらず何度も質問に答えてくださった国際交流室の丸瀉様・佐藤様、向こうでの生活を気にかけてくださった Imperial College London の Stepan 先生や指導教員の Ben Britton 博士・Jun Jiang 博士、本当にたくさんの方にお世話になり、充実した留学生生活を過ごすことができました。心から感謝いたします。ありがとうございました。